きすふれ！　7

きす☆ふれ　7

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20901943

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 本番無し, テル霊, 芹霊

今回もまあまあ短いです。無知シチュ師匠の総受けです。攻めたちが師匠を色々そそのかします。今回は本番無し、エク霊、テル霊、芹霊です。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

きす☆ふれ　7

（今日は誰も来てないのか、珍しいな）
霊幻がエクボとキスフレになったのを皮切りに、いつも大人数でキスフレたちは相談所に遊びに来ていた。
床を軽く掃きながら、ふ、と寂しさを覚えて、霊幻は驚いた。
（寂しさは感じないようにしていたのに……）
中学生の時に上手く射精できないと気付いてから、霊幻は１人で生きていく覚悟をしていた。
シモの話を避けるために、友達も作らなかった。
でも、エクボと友達になって、そこからいっぱい友達が出来て。
（また１人になったら、ってどうしても、考えちまうな……）
不安にも寂しさにも、鈍感になれていたのに。
そう、霊幻はぼんやりと広く見える相談所を眺める。
「おはようございます」
ドアが開く音に虚を突かれて、霊幻は反応が遅れてしまった。
「『流石に出席日数が……』とか言ってたので、影山くんたちに手伝いを頼まれて来ました」
「テ、ルくん」
キスフレたちでは無いことに、少しがっかりしてしまう霊幻がいた。贅沢はいけない、と内心首を振る。テルくんが来てくれただけでも、充分嬉しいんだから、と。
「ありがとな。もう少ししたら芹沢が来るから、仕事自体は問題無いんだ。宿題とかやっててくれていいから」
何度か手伝いに来ている輝気は、慣れた様子でささっと荷物を下ろしてお茶を淹れにいく。
「おー、悪いな」
霊幻も掃除を切り上げて席に戻り、メールチェックを始めた。
「どうぞ」
「ありがと」
湯呑みに伸ばした手を、掴まれた。
「霊幻さん」

じ、と紺碧の瞳に見つめられて、霊幻の息が止まった。輝気の顔面の攻撃力がヤバかった。
「僕、キス上手いんですよ」
「そ、うなんだ……」
ちゅ、と輝気は掴んだ手に唇を這わせる。
「僕もキスフレにしてくれませんか？」
「……いいのか？」
込み上げる嬉しさを噛み締めて問い返す霊幻に、狡猾な光を宿して輝気は目を細めた。
「もちろん」
「じゃあ、テルくんもキスフレに……ッん」
優しく柔らかく、でも有無を言わさぬ逃げられないキスを、デスクごしに仕掛けられる。
「は、……ぁ、っ」
舌を絡め取られて引き出されてしまった霊幻は、じゅるじゅると音を立てて舌フェラをされて、身震いする。
「……ね、もっと気持ちいいキス、してあげましょうか？」
とろんと上気した霊幻は幼なげに頷く。
「ここじゃ駄目です。ラブホ行きましょう？」
「え！？」
驚いて身を引こうとした霊幻の手を、やんわりと輝気は握り直す。
「大丈夫、何もしません。キスだけです」
「だ、だけどだな、こんなオッサンとラブホ入ったところを見られたら、テルくんが困るんじゃないか？」
「今時ラブホ女子会もあるんですよ？友達同士でラブホ行くのは珍しく無いです」
「……そっか……」
「それに、最新ゲーム機とかジャグジーとかあって面白いんですよ？僕、霊幻さんと遊びたいです」
「そうなのか？」
「あれ？もしかして霊幻さん、友達同士でラブホ行ったこと無いんですか？」
う、と霊幻は詰まる。

「そ、んなことは、無い、けど」
「じゃあ行きましょ！確か今日の朝は暇なんでしょう？店番は芹沢さんに任せて」
「でも……」
「僕、今日しか時間取れないんですよね……」
残念そうに大袈裟にしょげかえった輝気に、霊幻は罪悪感を感じてしまう。
「じゃあ、行こうか」
「嬉しいです！！」
おあつらえ向きに、芹沢が出勤する。
「ほら、早く行きましょう！」
「持ち物とか……」
「財布だけでいいですよ」
いぶかしむ芹沢を置いて、霊幻は少しワクワクしながら輝気について行く。
（ラブホか……初めてだな）
「あれ？こっちの方ってラブホあったのか？」
「……ええ、もう直ぐです」

そうして。

調味総合病院に着いた。

「騙したなああああああ！？」
「どう考えてもさっさと病院行った方がいいんですよ、霊幻さんは！！ほら、行きますよ！！」
「いやだあぁああああ！！」
「ええい、予防接種に連れて来られた犬みたいにコヤコヤ言わないでください！！」

抵抗むなしく、霊幻は空鞭で院内に引き摺られて行った。

※

「良かったですね、なんともなくて」
「……騙された……」
「まあまあ、今からラブホ連れて行ってあげますから、ね？」
病院を頑張ったご褒美はちゅーるじゃなくてちゅー。それでも霊幻の機嫌は直ったらしい。
「今度は騙すなよ……」
「はいはい」
次は、すんなり……霊幻はラブホに連れ込まれてしまった。
「すげえ……新作のＦＦがタダで遊べる……」
「霊幻さん」
ゲームに魅了されている霊幻の腕を引き、輝気は霊幻をベッドに押し倒した。
「今、どういう状況か分かってますか？」
ラブホに連れ込まれて、男にベッドに押し倒されている。
「？ん、」
ぐ、と手首をシーツに縫い止められながら、貪るように激しくキスをされて、霊幻は目を閉じる。
「ッん、ぁ、ぅン……っ、ッあ……！」
「っ、は、れいげんさん……」
息継ぎに口を離した輝気の頬を撫でて。
「は、ぁ……ッ、ゲーム、何する？」
無邪気に霊幻ははにかんだ。
「……ッ、……、……、」
輝気は顔を歪め、霊幻を見つめる。
「……すみません、シャワー浴びて来ます」
冷たいシャワーを慌てて浴びに行った。

輝気はきっちりと服を着込んで、ベッドに正座する。

「霊幻さん、そこに座って下さい」
霊幻もつられてベッドの上に正座する。
「いいですか、『何もしないから』と言われても、ラブホについていっちゃダメです」

「えっ」
「分かりましたか？」
「ハ、ハイ」
輝気の迫力に負けて霊幻はこくこくと頷く。
「『友達同士で行くのは珍しく無い』と言われても行っちゃいけません」
「えっ、でもテルくんだし……」
「僕でも駄目です。影山くんでも芹沢さんでもトメさんでも、誰に誘われても行っちゃいけません」
「トメちゃんとは流石に来ないけど……分かった」
はぁ、と小さく息をついて。
「……相談所に戻りましょうか」
仕方なさそうに、輝気は苦笑した。

※

「病院で見てもらって、何とも無かったんだってなあ？良かったじゃねえか」
相談所に戻ると、いつものキスフレたちが集まっていた。
「なんでお前らが知ってるんだよ」
くい、と霊幻はアゴをエクボに掴まれて、顔を寄せられる。
いつも通り受け入れようとした唇は……芹沢の手のひらでふせがれた。
「霊幻さん、もう、こんなことは辞めてください」
「どうしたんだよ」
戸惑う霊幻の視線を、芹沢は真正面から捉えて。
「好きです。俺と付き合ってください。もう、その唇を誰かに許さないでください」

やられた、とキスフレたちは苦々しく顔を歪めた。

続